

森倉 いちあ 『天国に一番近い音楽隊』

天国に一番近い音楽隊

森倉
いちあ

人
物

田中美咲 (25)	青山リハビリテーション
墨田きぬ (80)	病院の介護アルバイト
大川早苗 (78)	青山リハビリテーション
峰岸幸三 (83)	病院の入院患者
峰岸幸三 (83)	病院の通院患者
峰岸敬子 (50)	青山リハビリテーション
峰岸敬子 (50)	病院の入院患者
峰岸幸三の娘	
金田肇 (75)	青山リハビリテーション
金田肇 (75)	病院の入院患者
金田恵介 (50)	金田肇の息子
倉田栄子 (67)	青山リハビリテーション
倉田栄子 (67)	病院の入院患者
鈴木秀夫 (88)	青山リハビリテーション
鈴木秀夫 (88)	病院の入院患者
横川保 (79)	青山リハビリテーション
横川保 (79)	病院の入院患者
木田寿一 (89)	青山リハビリテーション
木田寿一 (89)	病院の入院患者

木越 博 (67)	病院の入院患者
柏木尚哉 (25)	ギタリスト。美咲の友人
渡辺信一 (53)	青山リハビリテーション 病院の事務局長
平川由紀 (51)	青山リハビリテーション 病院の看護師長
岡村真由 (28)	青山リハビリテーション 病院の看護師
篠田恵美 (40)	青山リハビリテーション 病院の介護アルバイト
小野祐一 (33)	青山リハビリテーション 病院の作業療法士
青山病院音楽隊の患者メンバー	
バンドメンバー	
ライブの観客	
武蔵野公民館演奏会の観客	
女性客	
横川の孫	
青山病院発表会の家族客	

○青山リハビリテーション病院・外観

『慈愛会・青山リハビリテーション病院』の看板

○青山リハビリテーション病院・レクリエーション室・中

田中美咲（25）が6人程度の患者の前で指揮棒を振りながら大声で

美咲「はい、そこ、笛のみなさん、」

墨田きぬ（80）が車椅子に座ったまま、リコーダーに息を吹き込んでいるが音が鳴らない。美咲はそばに行つて

美咲「人差し指だけ押さえて吹くだけですよ」

美咲がリコーダーを手に取って吹き口をのぞくと、食べかすが詰まっている。

きぬ「さつき、娘が月餅饅頭こうてきてくれたんで、みんなで食べましてん」

美咲は小さくため息をはき、グループに声をかける。

美咲「、、みなさん、少し休憩にしましょう」

思い出したように後ろを振り向き、車
椅子の鈴木秀夫（８８）に

美咲「鈴木さん、休憩のうちに補聴器つけて
もらって下さいね」

笑顔でカスタネットを持った鈴木が耳
に手をあて、

鈴木「え？何？掃除機？」

美咲は汗ばんだ額を、指揮棒を持った
手でぬぐう。

○同・中庭

ベンチで缶コーヒーを飲む美咲。上品
な薄手のカーディガンを肩にひかけた
大川早苗（７８）が微笑んで隣に座る。

早苗「ふふふ、あなたは大変かもしれないけ
ど、私達結構楽しんでいるのよ」

美咲「いえ、大川さんがピアノを弾いてく
ださってるおかげです。そうでなかったら、
どうなることやら、」

スーツ姿の渡辺信一（５３）が通りか

かり、足を止め、

渡辺「お二人とも精が出ますね。クリスマス
といつても、すぐですからね、頑張つて。

田中さん、あとで部屋に来てください」

美咲「あ、はい」

美咲は不安気に渡辺を見上げる。

○同・事務局・中

部屋の窓から庭の大きな満開の桜の木
を眺める渡辺。背後に立つ美咲に

渡辺「今日のアレ、あなたも働き始めたばかりで、なかなか頑張つて頂いて、、ねえ」

美咲「はあ、ありがとうございます」

首を少し傾げ、小さく返事をする美咲。

渡辺は美咲を振り返り、急に早口で

渡辺「で、なんであんなに参加者が少ないの？」

美咲「あ、あの、、、、」

渡辺「うちにはこんなに患者さんがいるのに、
今日、5、6人？」

美咲「参加してくれるようには声をかけては

いるんですが、なかなか皆さん、痴呆の方とか、機械をつけた方とか、手足が不自由な方とかで、なかなか参加が、、」

渡辺、語気を強めて、

渡辺「だから音楽レクリエーションで皆さんを元気づけようっていうのが趣旨な訳でしょ。もう少し頑張ってくれないと、、」

美咲「はい、、」

渡辺「理事長や病院長もクリスマス会には見学に来られるかもしれないし。ご家族の方々は沢山いらっしやるし。ねえ田中さん」

美咲「はあ、、」

うつむき加減で答える美咲。

○同・職員控室・中（夕）

白の作業服を脱いでロッカーにしまう

美咲。看護師のIDカードをつけた岡

村真由（28）があとから入ってきて

真由「お疲れさま。今日どうだった？」

美咲「はい、事務局長に、人数が少ないから、

もっと参加させろと」

真由、白衣を脱ぎながら、

真由「なるほどね、、新しい病院長が音楽好

きでね、それでこの病院にも音楽療法を、

ってことで始めたらしいから、必死ね、、」

美咲「そうなんですか」

真由「でも入って1か月ちよつとでしょ、、」

美咲「はい」

真由「患者さんの趣味とか特技、入院時に聴

き取りしてるよ。調べて声かけてみたら？」

美咲「あー、なるほど、有難うございます！」

はっとした様に言う美咲に微笑む真由。

○美咲のアパートの部屋・中（夜）

チェロの練習中の美咲。ラロのチェロ

協奏曲の譜面を睨み、顔をしかめる。

x x x

手をとめて、床に寝転ぶ美咲。テーブ

ルの上の『音楽療法士専門学校』の案

内と『桐野音楽大学大学院受験要項』

を手にとつて眺める。

美咲 「はあああああ」

バサツと要項を床に置き、寝返りをうつ。目を閉じて、ハツつとまた開け、

美咲 「そうだった、」

体を起こし、机の上のノートパソコンを見る。

x x x

パソコン画面で『青山病院音楽隊 音楽を一緒に奏でて、』と打ち込む美咲。

○青山リハビリテーション病院・廊下・中

白の作業服で台車を押して、使用済オムツを回収にまわる美咲。

○同・木田の病室・中

腕にチューブをつけた木田寿一（89）が目を閉じ、口を半分開けて横たわる。

美咲 「木田さん、こんにちは」

ちらつと木田の顔を窺う美咲。目を閉

じたままの木田。ベッド横のモニターの電子音だけが病室に鳴っている。オムツ入れからオムツを回収し、自分の台車に入れる美咲。

美咲 「それじゃあ、また、」

小声でうつむき加減に部屋を出る。

○同・栄子ときぬの相部屋・中

相部屋の一番手前のベッドで一心不乱に編み物をする倉田栄子（67）。

美咲 「こんにちは、倉田さん」

栄子は編み物の手を止めず、ちらりと美咲を見て微笑む。

相部屋の奥、カーテンレールをひいた中からズズズと麺をすするような音。美咲は台車をその前に進め、遠慮がちにカーテンの外から

美咲 「こんにちは、墨田さん、、ちよつと開けていいですか？」

一瞬の沈黙のあと、カーテンの中から、

きぬ（声）「はい、ええですよ」

美咲はカーテンを少しだけ開けて、

美咲「墨田さん、カップヌードルの匂いしますよ。みつかったら、取り上げられますよ、高血圧なんですから、、、」

ベッドに背中丸く太り気味のきぬ。

きぬ「そやから隠れてますねん」

美咲「お湯どうしたんですか？」

きぬ「お茶飲むゆうて、看護師の人に持って来てもろたんですけどな、、お湯の量が少のうて、麺が固いんですわ」

美咲「はあ、、」

一瞬考える美咲。

美咲「お湯、私がいる時だったら、持ってき

ますよ」

きぬ「そうですか！」

はずむような声のきぬ。

美咲「で、、墨田さん、相談があるんです、、」

カーテンの中に入る美咲。

○同・作業療法室と書かれた部屋のドア

○同・作業療法室・中

ゴミ箱の中を袋ごと取り換える美咲。

新しいゴミ袋の口を開けながら作業療

法を横目で窺う。小野祐一（33）が、

金田肇（75）がぎこちなくチェス台
にチェスを並べるのを見つめている。

小野「金田さん、毎回良くなっていますね」

金田「有難うございます。先生のおかげです」

嬉しそうに笑う金田。

美咲はポケットの中から折りたたんだ
紙を取りだし、目を落とす。

A4の紙に何人もの名前が書かれた手
書きリスト。金田肇の名前の横にはク
ラリネットと書かれている。

美咲「（小さく独り言）クラ、ゝ、か」

○同・廊下

小野を後ろから追いかける美咲。

美咲 「小野さん、すいません」

小野 「はい」

美咲 「あの、実は私、音楽レクリエーション担当なんです、それに参加してくれる患者さんを募集してまして、」

『青山病院音楽隊 音楽を一緒に奏で
てみませんか』と書かれたチラシを差し出す。小野はそれを受け取り、

小野 「あー、院長が推しているやつですね」

美咲 「はい、それで、ご相談なんです、」
手にした患者リストを見せる美咲。

○木越家・レッスン室・中（夜）

チェロのレッスンを受けている美咲。

木越博（67）が真剣に見つめる。

木越 「ねえ、あなたさあ、本当に今年、大学院を受験するつもりあるの？」

美咲 「はい、一応そのつもりでいます」

木越はため息をついて

木越 「それならもうちょっとできないとな、」

今ってどうしてるんだっけ？」

美咲「リハビリ病院でアルバイト職員です」

木越「そう、、、まあ、進路はきちんと考えて、、、」

美咲「、、、はい、、、」

チェロに目を落とす美咲。

○青山リハビリテーション病院・食堂・中（朝）

患者に食事介助をする美咲。男の大声。

峰岸「（声だけ）おい、おい」

美咲、隣で食事介助をする篠田恵美（4

0）に怪訝な顔で訊ねる。

美咲「誰ですか？」

恵美「峰岸さん。昨夜から身体拘束されてる」

声をひそめる恵美。

美咲「あの気難しそうな峰岸さん？なんで？」

恵美「末期癌の患者さんでね、でもしばらく

家に帰れないってわかって、暴れたらしい」

美咲「あー、、、」

美咲、眉をひそめる。

○同・廊下

台車を押してナースセンターに戻る美咲。忙しそうに歩いてくる、胸に『看護師長 平川』のIDカードをつけた平川由紀（51）が美咲をみつけて、平川「田中さん、それ終わったら、申し訳ないけど、峰岸さんのところで、どうしましたかって、聴いてきてください」

美咲「あ、はい」
ひっきりなしの峰岸のおーいの声。

○同・峰岸の病室・中

恐る恐るベッドのそばに近づく美咲。

美咲「峰岸さん、どうかなされましたか」

怒った目で美咲を睨む峰岸幸三（83）。
点滴のチューブがつながれている。

峰岸「はようこれを外せ」

ためらいながらも布団をめくる美咲。
手足に拘束帯がはめられている。

美咲「、、峰岸さん、ごめんなさい、これは

看護師さんに訊かないと、」

峰岸「あんたはちがうんか。なら、はよう看護師を呼んでくれ」

美咲「わかりました。伝えますね」

立ち去ろうとする美咲。

峰岸「水が飲みたい」

疲れたように言う峰岸。

美咲「あ、、ですよ。朝からずっと呼んでいらつしやるので、喉渇きますよね、」

美咲は枕元の吸い飲みを手に取り、峰岸に飲ませる。一気に飲み干す峰岸。

峰岸「あんたは何をしとるんや」

美咲「あー、私はアルバイトで、食事補助とか、患者さんの音楽活動を担当しています」
ポケットから音楽隊のチラシを出して
峰岸の顔の上に開いてみせる。興味も
なさそうに見上げる峰岸。

美咲「楽しいですよ。発表会も有りますし。
一人一人楽器を担当して歌も歌います。峰
岸さんは何か得意なものがありますか？」

峰岸 「、、昔は、、歌が好きで、盆踊りや氏
神さんの祭りで歌うのが好きやった」

寂し気に天井を見上げる峰岸。

美咲 「えっ、それならいっしょ、、」

言い終わる前に言葉を飲み込む美咲。

美咲 「（ためらいがちに）、歌いたいですか？」

峰岸 「、、」

美咲 「冷たい水に入れ替えてきますね」

吸い飲みを持って立ち去る美咲。

○同・レクリエーション室・中

20人程の患者が集まっている。ピア
ノの横で緊張の面持ちの美咲。

美咲 「皆さん、今日はメンバーも増えました！

それぞれの御担当は今から発表します」

x x x

各々がカスタネット、鈴、リコーダー、
トライアングル、等を手にして座って
いる。栄子は膝にリコーダーを置いて
いるが、棒針編みの手を休めず座って

いる。その横にリコーダーを手にした
きぬ。美咲が各々の患者に担当楽器の
説明をして回る。

x x x

美咲、きぬの横に来ると

きぬ「栄子さん、連れて来ましたけど、こん
なんでええんですか」

美咲「有難うございます」

きぬに笑顔で頷く美咲。

背筋がピンと伸びた金田がクラリネット
トを持って座っている。美咲は部屋の
脇で椅子に座って見学する小野に会釈。

美咲「金田さん、クラリネット、御上手だそ
うですね。来週あたり、1曲演奏してみま
しょうか？」

金田「いやあ、できますかね」

嬉しそうに微笑む金田。

x x x

美咲が演奏曲を説明しているとリハビ
リテーション室のドアが空き、真由と

恵美がベッドを押しして、ベッドごと木田が入ってくる。駆け寄る美咲。

真由「院長がどうしてもつていうもんで、」

美咲「院長が、、」

真由「モニターの音、うるさいかも」

美咲「あ、いやあ、、そんなこと」

美咲、戸惑いながら木田をみつめる。

○ライブハウス『B f l a t』・外観（夜）

○同・中（夜）

バンドメンバーとリハーサル。チェロを弾いている美咲とギターを弾いている柏木尚哉（25）。

○同・外（夜）

ライブハウスから出てくる美咲と尚哉。

尚哉「で、美咲、まだその仕事続けるの？」

美咲「とりあえず、、演奏会まかされたし、、」

尚哉「演奏だけじゃやって食ってけないしな」

煙草に火をつける尚哉。

x x x

線路の踏切の前で待つ二人。踏切の音。

尚哉「で、おまえ、録音の曲練習してる？」

美咲「してるよ」

尚哉「金がもう少したまったら録音できるんだけどな。もうちよいだな、」

電車が二人の前を通りすぎる。

○青山リハビリテーション病院・レクリエーション室・中

早苗のピアノにのり、金田が『川の流
れに身をまかせ』のクラリネットのソ
ロを吹いているが、麻痺した右手の指
が回らず、途切れ途切れになっている。
そこに横川保（79）が麻痺の残る右
手で場違いなトライアングルを鳴らす。

美咲「横川さん、合図したら鳴らして下さい」

横川は照れ笑いをする。

美咲「金田さん、上出来です。次回も吹いて

頂きますよ。もっと思いい切り、いつ死んでもいいくらいに吹いてください」

グループが大笑いし、金田も上機嫌で自分の席に戻る。

美咲「今日は先日お配りしてある歌を歌います。今回が初めての皆さんは歌えたら歌ってください。合唱隊の皆さん、1列に並んでみましょう」

x x x

車椅子で1列に並んだ合唱隊。

きぬ「お腹が空いて歌えませんわ」

美咲「もうすぐおやつ時間ですから、、」

鈴木「練習してきました」

ろれつがまわっていない鈴木、美咲に笑顔を向ける。入れ歯が入っていない。

美咲「鈴木さん、入れ歯入れて来て、、」

栄子も並んでいるが、赤いマフラーを編む手を休めず、美咲に微笑む。

美咲「倉田さん、そのマフラー、進みましたね、、、歌えたら歌ってくださいね」

峰岸がピアノのすぐそばに不機嫌な面
持ちで車椅子の上に座っている。

美咲「峰岸さん、遠慮なく大きな声で歌って
くださいね」

峰岸「、、、、」

ちらつと美咲を見て、無言のままの峰
岸。美咲は指揮棒を持ち、早苗が『青
い山脈』のピアノ伴奏を弾き始める。
バラバラの声。

x x x

美咲「はい、皆さん、もう一度最初から歌っ
てみましょう」

もう一度歌い始める合唱団。

x x x

だんだんとピアノにあい始める。
脇に寄せたベッドに横たわっている木
田を何気なく見る美咲。木田の手が歌
に合わせて動いたかと思うと、止まる。
驚いて凝視する美咲。峰岸は不機嫌そ
うな表情ながらも大声で歌っている。

x
x
x

美咲 「はい、皆さん、少し休憩しましょう」
合唱団が思い思いにはけていく。

○同・中庭

早苗が自動販売機で飲み物を選んでい
る。駆け寄る美咲。

美咲 「大川さん、私、買いますから」

自販機にお金を入れる美咲。

早苗 「あら、まあ、有難う、」

ためらいながら美咲から缶コーヒ―を
受け取る早苗。花柄の杖をつきながら
ゆつくりとベンチに座る。

美咲 「3曲もお願いしちゃったのに、もう今
日こんなに完成して来てくださって、有難
うございます。大助かりです」

早苗 「ふふ、こんな感じでいいかしらね」

嬉しそうに微笑む早苗

美咲 「もちろんです！ 大川さんはいつから
ピアノをやってらっしゃるんですか？」

早苗 「子供の時から、あなたは？ チェロを弾いてるって看護師さんから伺ったけど」

美咲 「はい。2年前に音大卒業したんです」

早苗 「あらあ、そう。音大、憧れたわ、若いつていいわね」

美咲 「大川さんは調子はいかがですか？ ご自宅から受診されるの大変じゃないですか？」

早苗 「体が痛くてね、移動はつらいけど、音楽の楽しみができたから良かったわ」

伏し目がちに微笑む早苗。

美咲 「ごめんなさい、大川さん、ピアノ、無理のない範囲で。ストレスになったらいけませんから、」

早苗 「大丈夫よ。練習してる時は足の痛みを忘れることも多いし、」

美咲 「かなり痛みますか？ 大丈夫ですか？」

心配そうに早苗の顔をのぞき込む美咲。
早苗 「痛いのはいつものことだから。治らな
いし、でも、この痛みは誰にもわからな

いわね、」

足をさする早苗。

花壇にチューリップの花が満開である。

○同・木田の病室（夜）

木田のベッドの前で佇む美咲。モニターのピコピコという音だけが鳴り、木田は目を閉じたまま。ポケットから携帯電話を取りだし、音楽をかける美咲。ベートーヴェンの交響曲の第一楽章が始まると携帯電話を木田の耳元にあてる。反応のない木田。音楽をとめる。その瞬間、木田の手が少し左右に動く。

美咲「！！！」

驚いて口だけ開ける美咲。じっと木田を見つめて、立ち去る。

○同・廊下（夜）

おーい、おーいと叫ぶ峰岸の大声。

○同・峰岸の病室・中（夜）

美咲 「どうされましたか。暑いですか？」

峰岸の顔をのぞき込む美咲。

峰岸 「、、暑いし、喉が渴いた」

美咲 「今冷たい水持ってきます。今日はお疲れ様でした。峰岸さん、凄くいいお声されてるんですね」

峰岸 「冷蔵庫のオレンジジュース取ってくれ」

美咲 「あ、はい」

x x x

吸い飲みを峰岸の口にあてる美咲。

峰岸 「背中が痛い」

一口飲んで、ハリのない声で言う峰岸。

美咲 「少し背中さすりますよ」

峰岸の背中に片手を入れてゆっくり動かす美咲。

峰岸 「このままこうして死ぬんやろか」

小さい声で言う峰岸。美咲は手を動かしながら

美咲 「そんなに早く死ななくても、、」

峰岸 「何の楽しみもない。こんなになつて」

眼尻に涙を浮かべている峰岸。

美咲 「、、、」

手を動かし続ける美咲。

○駅前商店街・路上・朝（数日後）

エレキチェロとギターで路上ライブを
している美咲と尚哉。日差しがきつく、
額に汗をかいている。たまに足をとめ
る客がギターケースに小銭を入れる。

○コーヒーショップ・店内

向き合つて座っている美咲と尚哉。テ
ーブルにはサンドイッチとコーヒー。

尚哉 「へ？手が動いたつて？」

美咲 「そう！」

尚哉 「気のせいじゃなくて？」

美咲 「ちがう、確かに動いた」

尚哉 「でも、、なんかネットで読んだことあ
つたな、、音楽聴かせてたら、意識失つて

た人が、実はその音楽を聴いてたって話」

美咲「そうなんだ！ 聴こえてるんだ、」

尚哉「、、なんだかんだいって、その仕事、

結構むいてるんじゃない？」

美咲「（声のトーン下げ）いや、そうでもない」

尚哉、サンドイッチを飲み込み、

尚哉「そもそも、何で音楽療法の仕事しよう
と思ったんだよ？」

美咲「音楽の仕事で、人の心を癒すお仕事で
す、つていうのに惹かれた、、のかな、、」

尚哉「ふーん」

美咲「でもさ、何の為に音楽やってたのか、
最近、わからなくなってきた、、大学院、
今年の受験、まだ迷ってるし」

美咲を見つめる尚哉。

美咲「、、受験も決心できないし、かといっ
て、病院が勧めてくれた音楽療法士の学校
も決心がつかないし、、」

コーヒーを握り窓の外を眺める美咲。

○青山リハビリテーション病院・廊下・中

木田のベッドを押している美咲。

美咲「今日もやりませよ」

独り言を言う美咲。木田は目を閉じたまま。

○同・レクリエーション室・中

木田のベッドを脇にセットし、室内を見渡す美咲、早苗のピアノにあわせ歌うきぬと、歌わないが笑顔の栄子。

美咲「墨田さん、御上手です。倉田さん、」

歌詞が書かれた紙を手に行っている栄子。編み物の棒針は膝に置いてある。

早苗「栄子さん、さっき少し声を出されたん

ですよ」

美咲「えええ！！」

早苗と栄子をかわるがわる見る美咲。

x
x
x

美咲「皆さん、今日は全体練習の前に個人で
ご自分の担当楽器の練習をしましょう。ひ

とりずつ回っていきますからね。何かあつたら声をかけてください。合唱団の皆さんは大川さんのピアノで歌の練習です」

x x x

金田がクラリネットの音出しをしているが、指が回らない。

金田「なかなか走る走るいきませんわ」

美咲「そんなことありません！ 毎回格段に動きが良くなつてらっしゃいますよ！

小野先生も驚いていらっしゃいました」

金田「そうでしょうか」

うれしそうな笑顔の金田。

隣にトライアングルを持って座っている横川。

横川「私もこれじゃあつまらん」

訴えるような視線をむける横川。

美咲「そうですか、、じゃあ、何やりましょ

う？ 墨田さんみたいに縦笛どうです？」

リコーダーに息をふきかけているきぬ。

横川「いや、あの、、ピアノ、、」

横川、遠慮がちに小声で言う。

美咲「ピアノですか！、あ、でも、できるかもしれない！」

横川「そうかね」

美咲「頑張ったら、クリスマス会に1曲弾けるようになりますよ！あとで居残ってやってみましょう！」

横川の表情がぱっと明るくなる。

木田のベッド脇に立っている由紀に気が付く美咲。駆け寄って

由紀「人数が増えたのね。にぎやかかね」

美咲「師長、ありがとうございます」

由紀「大川さん、心臓の御病気がありませんけど、それからくる足の痛みが酷いみたい、、気をつけてあげて」

早苗のピアノにあわせて歌っている峰岸。その横で鈴木が耳の後ろに手をあてながら歌っている。その横には栄子が体を揺らしてリズムに合わせている。

由紀「あら、倉田さん、」

美咲「私は聴いてないんですが、大川さんが、さつき倉田さんが少し歌ってたと、」

由紀「あら、倉田さんはね、痴ほう症で、長い間自宅療養だったんだけど、最近は失語症になってね、」

美咲「そうなんですか、」

美咲、楽しそうな表情の栄子を眺める。

○同・廊下（夕）

美咲がオムツゴミ回収の台車を押している
いと声がきこえる。

真由（声）「はい、木田さん、今日はこれで胃瘻は終わりですからね。お疲れ様でした」

○同・木田の病室（夕）

美咲が入室する。

美咲「お疲れ様です」

真由「あ、ご苦労様」

美咲、使用済みオムツを回収しながら
美咲「岡村さんはいつもそうやって木田さん

に声をかけてらっしやるんですか」

真由「木田さんだけじゃなくて、みんなに」

かたづけける手を休めず答える真由。

美咲「でも、木田さんみたいに意識がない患者さんは、、、」

真由「意識がなくても、聴こえてるらしいし、、、気持ちというか、心の持ちようかな」

美咲「そうですか、、、看護師の皆さんはやっぱり心構えからしてちがうんですね、、、」

真由「えー？田中さんはちがうの？」

微笑む真由。

美咲「いやあ、、、私は看護師じゃないし、、、」

真由「でも最近、田中さんのレクリエーションが始まってから、楽しみにしてる人多いじゃない。元気になった人、ほら、墨田さんとか、倉田さんとか」

美咲「はあ、、、」

真由「音楽療法士にはならないの？」

美咲「、、、迷ってます、、、」

美咲、眼を閉じたままの木田を眺める。

○同・外来待合ホール・中（朝）

美咲がホールを横切っていると、椅子に座っている早苗をみつける。走り寄る美咲。

美咲「大川さん、おはようございます。今日は診察ですか」

早苗「あら、おはようございます、、、、そんな今日はね、、、、」

顔をしかめて足をさすっている早苗。

美咲、心配そうに眺める。

美咲「今日はだいぶ痛そうですね、、、、」

早苗「最近特に、、、、生きてるのが億劫で、、、、」

美咲「、、、、」

早苗「そんなこと言ったらばちあたりだけど」

美咲「そんな、、、、大川さん、どうか無理せずに、、、、ピアノもできる範囲でやりましょう。休んだっていいんですから」

早苗「そうさせてもらうかもしれないわね、、、、」
顔をゆがめている早苗。

○同・レクリエーション室・中

横川が一人、なれない手つきで鍵盤をさわっている。横に座った美咲。

美咲「はい、ここが、ドの音、お隣がレ、その隣がミです。1本ずつ。親指から、」

折れ曲がって固くなった親指で鍵盤をどうにか叩く横川。ミまで3本弾くまでに時間がかかっている。

横川「だめだな、こりやあ。脑梗塞でやっちゃってから、ずうっとこんなんでね、」

悔しそうな横川。額に汗が浮かぶ。

美咲「横川さん、まだ初めて5分もたってないんですから、、はい、最初からもう1回」

x x x

どうにかドからミの3つの音をたどたどしくひけるようになった横川。

美咲「動くようになりましたね、横川さん！」

嬉しそうに顔を緩めます横川。

横川「悪いね、時間とってもらって」

美咲「いえいえ。ピアノはいつもここにある

んですから、毎日練習してください」
もう一度練習する横川と美咲。

○同・栄子ときぬの病室・中

縦長の急須を持った美咲。きぬと栄子の仕切りカーテンは開け放たれている。

美咲「墨田さん、お湯持ってきました」

小さめの声できぬのテーブルに置く。

きぬ「あー有り難い。早速」

枕の脇からカップヌードルを取りだす
きぬ。テーブルには、美咲が書いたリコーダーの楽譜とリコーダー。

美咲「墨田さん、練習されてたんですか？」

きぬ「はい。昔を思い出して吹いてますわ」

美咲「これが吹けるようになったら、クリスマス
マスの歌も新しく加えましょうね」

きぬ「クリスマスまで生きてますんかいな。

まあでも、娘も来るゆうてましたわ」

カップヌードルに湯を入れて蓋をする

きぬ。美咲は栄子のほうを振り返り

プヌードルを食べている。

○木越家・レッスン室・中（夜）

美咲、緊張の面持ちでバッハの無伴奏
チェロ組曲の6番を弾く。木越は真剣
にみつめる。

木越「音程まだ甘いな」

美咲「、、はあ」

木越「これ試験曲でしょ？ まだ形になっ
てないな、、大学院を受験するなら、早く決
めて、本腰いれることだな」

美咲「はい」

木越「35小節目からもう1回弾いてみて」
チェロを弾きだす美咲。

木越「この曲、あなた、どんな解釈をしてる？」

焦る美咲。

美咲「えーと、、私はこの組曲の中ではこれ
が一番好きで、、なんか、、自分が死んだ
ら、天国に行ってこれが流れて、お疲れさ
ま、って迎え入れてくれてるような曲です」

木越 「ああ、そうね、そうだね。いい線いつてるよ、あなた」

ぱっと笑顔になる美咲。

木越 「兎に角、本気になることだな、何事も」
もう一度弾いてみせる木越。

○ライブハウス『Bflat』・中（夜）

ホワイトボードに『本日の出演・True Blue他』の表示。

ライブ中の美咲と尚哉、バンドメンバー。客席に50人程度が入っている。

x x x

尚哉 「今夜はありがとうございました。次回ライブは来月末を予定してます、」

笑顔の美咲とバンドメンバー。

○同・カウンター・中

演奏中の他のバンドを背にビールを飲む美咲と尚哉。上機嫌の笑顔の二人。

美咲 「ライブはいいねえー」

尚哉 「録音、日程決めた」

美咲 「えっ、いつ？」

尚哉の携帯電話をのぞき込む美咲。

○青山リハビリテーション病院・庭

木に蝉がとまり、鳴き声が激しい。快晴で日差しが眩しくゆらいでいる。

○同・峰岸の病室前

病室のドアを少し開けて、中の声に気がつき、手をとめる美咲。中をのぞく。

○同・峰岸の病室・中

ベッドに横たわる峰岸。個室の脇にはポータブルトイレが据えてある。ベッドの脇の椅子に座った峰岸敬子（50）。

峰岸 「お母さん、どうな？」

敬子 「あいかわらずや」

峰岸 「そうか、」

耳にラジオのイヤホン指そうとする

峰岸。敬子は思い立ったように

敬子「お父さん、昨日病院から電話あってね、この病院が嫌なら、大田病院に部屋の空きがあるさか、どうですか？」

峰岸「、、おお、、」

天井を見て相槌を打つ峰岸。

敬子「それで、できるだけ早めに決めて、病院にも連絡せなあかん、、」

峰岸、急に語気を強めて

峰岸「なんで大田病院みたいな死人が行く病院へ行かなあかんのや？安いからか？」

敬子「安いからじゃないって！」

小さいながら、語気を強めて言う敬子。

敬子「お父さんがこの病院嫌やって言うからわざわざ探してもろたんやのに、、」

勝男「そやったたら、うちへ帰ったらええやないか。なんで家に帰ったらあかんのや」

大声の峰岸。敬子は眉間に皺を寄せて、敬子「お父さん、いつもそうやったやろ？自分気が入らなんだら、大声出してあたり

散らして。怒ったらなんでも他人が自分の
思う通りになるおもて」

峰岸「そんなことあるもんか！」

痩せた体でベッドから起きあがろうと
する峰岸、またすぐベッドに横たわる。

敬子「うちには難病もったお母さんがおるん
や。お父さんが帰ってそんなにあたり散ら
したら、お母さんのほうが体もたんのや」

眼に涙を浮かべている敬子。

敬子「最後まで、お母さんのことを思うん
やったら、病院でおってくれるしかないわ。

大田病院が嫌なら、いくらでも高くて綺麗
なターミナルケアの病院に入れたる。それ
以外に方法はない」

口を真一文字に結んだ敬子。

峰岸「、、」

枕元に置いてあった白いタオルを自分
の顔にかける峰岸。その下から、鼻を
すする音が聞こえる。

峰岸「、、わかった、、」

タオルで顔を覆ったまま、左手で丸く
オーケーマークをしてみせる峰岸。

花瓶に生けたピンクのバラの花びらが
一片、はらりと落ちる。

峰岸「そやけど、家に帰ったほうが、はよ
う終われるんとちがうか？」

廊下で聴いていた美咲、そっとドアを
閉めて立ち去る。

○同・レクリエーション室（翌日）

室内に20人程の参加者たちが集まる。
脇にベッドごとの木田。峰岸以外は会
話をし、笑顔になっている。

美咲「はい、皆さん、今日は、全体で演奏す
る曲以外で、それぞれ皆さん個人でクリス
マス会に歌う、または演奏される曲を最終
決定しますね」

紙を手に取り読み上げる美咲。

美咲「金田さん、クラリネット、曲は『川の
流れに身をまかせ』、ピアノ伴奏大川さん」

金田 「(嬉しそうに) はい」

金田、クラリネットを撫で、笑顔。

大川 「(笑顔で) はい」

美咲、早苗の様子をうかがう。

美咲「倉田さん、『ブルーライト・ヨコハマ』、

私と二人で歌」

栄子に笑いかける美咲。

美咲「横川さん、『アメイジング・グレイス』」

横川「できるかねえ」

照れた笑いでうれしそうな横川。

美咲「それから、峰岸さん、『河内音頭』です」

返事をせず、不機嫌な峰岸。

きぬ「踊ったらどうですか」

きぬ、盆踊りの手真似をする。

美咲「踊ってもいいです。伴奏はカラオケ」

美咲、ひきつった笑顔。

美咲「それから、」

リストを読み上げる美咲。

x x x

美咲「はい、ではこれで決まりです。皆さん

はりきっていきましようね」

由紀が入室してくる。

由紀「こんにちは。精がでますね、皆さん」

美咲「あ、師長、」

由紀「邪魔してごめんなさいね。院長が音楽

活動中の皆さんの写真を撮っておいてっ

ておっしゃって。写真を撮らせて」

x x x

美咲「皆さん、並んで並んで。いいですか」

脇に立ち、患者全員を3列にする美咲。

x x x

ピアノ席に早苗、クラリネットを持っ

て立っている金田、縦笛を持つきぬ。

パシャ、という音とともに撮影終了。

x x x

指揮棒をもった美咲、笑顔で

美咲「では練習始めます。金田さんから」

金田と早苗が演奏を始める。金田の指

はかなり滑らかになってきている。

x x x

美咲「金田さん、大川さん、いいですねー」

全員拍手。横川、笑顔で、

横川「そんなふうに指が回るようになりたいですわ」

金田も笑顔で席に戻って行く。椅子に座る瞬間、急にその場に倒れる。

美咲「金田さん！」

駆け寄る美咲。

○金田家・外観（数日後）

庭の花壇に大きな昼顔が咲いている。

○金田家・居間・中

金田の遺影に手を合わせる喪服の美咲。

金田恵介（50）が脇で正座している。

美咲「お葬式に参列できず申し訳ありません」

金田「有難うございます、、いつも電話でお話をお伺いしていました。父は久しぶりの演奏が楽しかったようで、、」

美咲、仏前のクラリネットを見て、

美咲「、、そうですか」

金田「晩年は脳梗塞でふさぎ込んでいて、でも最近は何しづりに吹く気になって喜んで、、本当に有難うございました」

美咲「とんでもない、こちらこそ、、」

遺影を見つめる美咲。

○青山リハビリテーション病院・レクリエーション室・中（数日後）

栄子と一緒に歌の練習をしている美咲。
栄子の歌は途切れ途切れだが、はっきり歌えている。由紀が入室してくる。

由紀「田中さん、、ちよつと」

美咲「はい」

部屋の脇で由紀に並ぶ美咲。由紀は声をひそめて、

由紀「大川さんが、、2日前にお亡くなりになつて、、自殺だったらしいの」

美咲「えっ、、」

美咲、無言のまま立ち尽くす。

○美咲の部屋（夜）

電気はつけたまま、ベッドで頭までタオルケットをかぶっている美咲。

由紀（声のみ・回想）「散歩に行くって出かけられて、帰らなかったそうなの。海で、、痛みに耐えて生きるのがつらいつて、、」

○同（翌朝）

美咲、ベッドの上でタオルケットから頭だけ出して携帯を手に行っている。

尚哉（電話の声）「え、今日休んだの？」

美咲（鼻声で）「体に力入らないし、休んだ」

尚哉（電話の声）「でもその二人が亡くなったのはおまえのせいじゃないんだしさ、、」

美咲「そうだけど、できることはいっぱいあったような気がする。でもできなかった。勉強してたら、何か役に立てたはずなのに、勉強しようとしなかった」

眼を閉じる美咲。大粒の涙が落ちる。

○路上・外

携帯で話しながら信号待ちの尚哉。

尚哉「でも、仕事は待ってる人がいるから、、」

歩き出す尚哉。

○美咲の部屋・中

タオルケットを頭にかける美咲。

美咲「私、ばちがあたったんだ。チェロも仕事も、本気で取り組まないから、、」

美咲、タオルケットの下で体を丸める。

○木越家・レッスン室・中（夜）

バッハの6番の組曲を弾く美咲。首を傾げ、途中でとめる木越。

木越「今日、何かあったんですか？」

美咲「、、いえ、特には」

木越「音に身が入ってないな」

美咲「、、」

木越「音には心が如実に表れるよ。何があっても心を込めて弾くってのが我々の仕事

だからね、まあ建前は」

木越が6番を弾いてみせる。

木越「来週、演奏会あるけど、来てみる？」

美咲「あ、はい、」

恐ろしく美しい音が鳴り響く。見つめる美咲。

○青山リハビリテーション病院・事務室・中

渡辺の机の前に立っている美咲。座つ

たままの渡辺。

美咲「先週は急なお休みを頂いて、御迷惑を

おかけいたしました」

頭を下げる美咲。

渡辺「まあ体調不良は誰にでもありますし。

金田さん達のことは残念でしたが、」

美咲「、、はい」

渡辺「あと、今後のことなんですが、院長が

今回のこともあって、、ねえ、、音楽療法

士の有資格者を雇いたいと、、それで、、

田中さん、今後はどうされますか？」

ジロツと美咲を一瞥し、机の上の書類を片付けながら事務的に続ける渡辺。

美咲「、、、、」

うつむき、戸惑い顔の美咲。

渡辺「次の採用もかけないといけなないのでね」

美咲「はい、、、、あの、、、、」

美咲、蚊のなくような小さな声で

美咲「それでは、延長はしないということ」

渡辺「そうですか、わかりました」

笑顔で手をとめて美咲を見あげる渡辺。

○同・中庭

自動販売機でお茶を買う美咲。

開けた窓越しにつたないピアノの音。

x x x

中を窓からうかがう美咲。中では横川がひとり、ピアノの鍵盤をぎこちない指で弾いている。ドレミファソラシドの8音を弾いている横川。何も言わず佇む美咲、うつむき加減に立ち去る。

○武蔵野公民館・外観（数日後）

『木越博 バツハ無伴奏チェロ全曲演奏会』と書かれた立て看板。

○同・中

満員の観客の中で舞台上で木越がチェロを弾いている。見つめる美咲。

x x x

終盤、周囲を見渡し、感嘆のため息の中に、涙を流している観客をみつける美咲。

美咲「（独り言）なんでこんなにちがうんだ」
舞台上の木越から目を離さず、眉間に皺を寄せ、考えこむ表情の美咲。

○美咲の部屋・中・夜

チェロを練習する美咲。何度も一心不乱に同じ部分を弾き直す。眉間に皺を寄せ、真剣な眼差し。時計は午前3時。

○スタジオ『フラジオレット』・中（数日後）

ヘッドホンをつけて真剣な眼差しで演奏する美咲と尚哉。

○路上（夜）

チェロとギターを背中に背負った2人。

尚哉「録音、上手くいったよな」

二人、顔を見合わせて満面の笑顔。

尚哉「ソロのチェロ、いい曲だったな」

笑みが消え、急に真顔になる美咲。

美咲「ありがと、あたしさ、やっぱり、

大学院、受けようと思って」

尚哉「決心ついたんだ？」

美咲「実質上、仕事、クビになったんだよ、」

尚哉「えっ！」

美咲「仕事は年末まで。で、この際、やり

たいことは何かって考えたんだけど、もっ

と音を探求してみようかとか、さ」

下弦の月を見上げる美咲。

○青山リハビリテーション病院・食堂・中

入居者の食事介助をする美咲と恵美。

恵美「峰岸さん、また暴れて、看護師さんに

も大声で怒って、昨日、大変だったのよ」

美咲「、、そうなんですか」

伏し目がちになる美咲。

○同・峰岸の病室・中（夕）

峰岸が目を閉じ、点滴につながれている。美咲が音をたてないようにベッド脇に立つ。峰岸が目を開け、

峰岸「今何時や？」

美咲「あ、すみません、起こしてしまいましたか？もうすぐ5時ですよ」

峰岸「病院におると、今日が何日か、何時か、

わからんようになるな」

美咲「外は秋らしくなってきましたよ」

峰岸「脇腹のほう痛みがひどくなってきた、、もう、あんまりもたんない」

顔をゆがめる峰岸。美咲は峰岸の脇腹

のあたりに手をいれて動かす。

美咲 「ここらへんですか？」

軽く息をはいて目を閉じる峰岸。

峰岸 「若いつていうのはええな。俺もやりた
いことあったな、昔は」

美咲 「前は、何のお仕事されてたんですか」

峰岸 「大工でな、でも好きじゃなかった。

嫌やった、人間、好きな仕事をするに限
るな。家族の為にゆうて働いても、結局は、
最後は、ひとりや。最後は自分ひとりや」

美咲 「、、」

表情を窺い、体をさすり続ける美咲。

美咲 「峰岸さん、『河内音頭』お上手ですね」

峰岸 「昔は盆踊りや氏神さんの祭りで、まだ
小さい娘を抱いて歌ったもんや、毎年」

美咲 「そうでしたか、、」

峰岸 「故郷の海を見てから死にたいね」

目を開け、天井をみつめる峰岸。

峰岸 「家で、、死にたい」

無言で手を動かし続ける美咲。部屋の

窓から夕陽が差し込んでいる。

○商店街・路上（数日後）

商店街の脇で、空のギターケースにCDを入れて置いている。その後ろでチエロとギターを演奏する美咲と尚哉。

x x x

曲が終わり、聴いていた女性客がCDを手に取り、話かける。

客「このCD、オリジナルですか？」

尚哉「はい、今月録音したばかりの新譜です」

客「前、ライブハウスで聴いたことあるの。

良かったわ。頑張ってたね」

2000円を尚哉に手渡す客。

美咲・尚哉「（勢いよく）有難うございます！」

他の客もCDを手にとって眺めている。

○路上・急な勾配の坂（日が変わり）

チエロケースを背負い急な坂を上る美咲。背後に海。

美咲「（独り言）なんでこんなに大変なんだよ、この坂はさ、、、！」

○青山リハビリテーション病院・中庭

中庭の花壇にコスモスが揺れている。
チェロを背負い病院に入っていく美咲。

○同・レクリエーション室・中

きぬ、栄子、横川、峰岸、鈴木、他の患者が車椅子で座っている。木田もベツドごと、脇につけている。

美咲「皆さん、少しが空いてしまっただごめんなさい。今日からまた12月の演奏会に向けて頑張りますよう！」

きぬ「クラリネットも、ピアノもおらんようになっただもて」

美咲「大丈夫です。私が弾きますからね。今日は全体合唱から始めましょう！」

ひきつった笑顔の美咲。ピアノの前に座り弾き始める。

x x x

栄子だけが大きな声で歌っているが
全員バラバラで、士気がない患者達。

x x x

1 曲終り。

美咲「、、栄子さん、よく練習されてますね！
今までで一番良かったですよ！」

うれしそうな栄子に笑いかける美咲。

美咲「、、あの皆さん、しばらく時間も空いてしまつて、その、、元気もなくなつてしまつたと思うのですが、、次回からはまた頑張りましょう、、」

返事なく士気が下がつたままの患者達。

美咲「あの、今日はそういうことで、私、今日チエロ演奏します！、、亡くなられた金田さんと大川さんに向けて、、」

峰岸「俺らももうすぐ死ぬわ」

やけくそ気味に言う峰岸。

鈴木「(入れ歯の入っていない、ろれつのみわっていない声)ワタシら、みんな死にます」

患者たちから笑い声。

きぬ「せめて美味しいもん食べなあかな」

更に患者達から笑い声。峰岸の表情も

ゆるむ。

美咲「、、はい、、今日演奏するのは、バッ

ハというドイツ人が作曲した曲です」

x x x

深い深呼吸をして、美咲、バッハ、無

伴奏チェロ組曲6番のアレマンドを演

奏する。患者達が真剣に聴き入る。

x x x

美咲の弾くチェロの音楽が鳴る中（回

想始まり）クラリネットを吹く金田。

ピアノを真剣に弾いている早苗。病室

で一緒に歌を練習する栄子。リコーダ

ーをつまらせているきぬ。ピアノの鍵

盤を汗して弾く横川、ベッドで涙をう

かべる峰岸（回想終り）

x x x

弾き終わり立ち上がって礼をする美咲。

緊張のまま大きな拍手をする患者達。

横川 「天国に昇ったみたいなき感じですよ」

きぬ 「そやけど、なんや、まだまだですよ」

緊張が切れ、どっと笑い声がする室内。

照れ笑いの美咲。その時、美咲の目に、

脇のベッドの木田の手が左右に振れて

いるのが映る。ベッドに駆け寄る美咲。

美咲 「木田さん！！」

木田 「、、」

もう一度手を左右に振り、目をあける。

美咲 「木田さん！！」

また目を閉じる木田。

○トヨシマ遊園地・外（数日後）

パンダとクマの着ぐるみを着た尚哉と美

咲。音楽にあわせて子供達の前で踊る。

○同・オーブンカフェ・外

着ぐるみの頭の部分を外した尚哉と美咲。

ホットドッグとコーヒーを手に歩く。

尚哉「、、で、その翌日死んだんだ、その人」

美咲「そう。その日当直だった看護師さんから聞いたんだけど、開け放した病室から、ベッドの上で、看護師さんを見て、手を振ってたんだって、バイバイって感じですか」

尚哉「お別れ言ってたんだ」

ふたり、席に座って

美咲「そうだろうね、、聴こえてたんだね」

美咲、コーヒーを一口飲み

美咲「あたし、先週、大学院の願書出したわ」

尚哉「おっ！やるねーどうなるかねー」

ホットドッグにかぶりつく尚哉。

美咲「本当にね、、」

観覧車の上の晴れた空を見上げる美咲。

○青山リハビリテーション病院・外観

入り口の看板にクリスマスMASの飾り。

家族連れが入っていく。

○同・レクリエーション室・中

40人ほどの家族連れ。クリスマスの赤いマントと帽子をつけた患者達。

きぬ「こんなトンガリ帽かぶしてからに」

文句を言いつつ笑顔のきぬ。

美咲がピアノの横に整列した患者達に、

美咲「皆さん、今日は思い切り楽しんで演奏

しましょうね！」

緊張の面持ちの横川、美咲に向かって。

横川「弾けますかね、」

美咲「大丈夫です。隣に私があります」

x x x

全員が席につき美咲もピアノに向かう。

恵美が挨拶とプログラムを読みあげる。

恵美「皆さま、本日はお忙しい中、青山病院

音楽隊のクリスマス発表会にお越し頂き、

ありがとうございます、」

x x x

恵美「ではプログラム1番、2番、続けて御

願い致します」

美咲がピアノから、手をあげて合図し

て、『青い山脈』が始まる。歌、鈴、カ
スタネット、トライアングル、リコー
ダーの合唱。栄子、きぬ、鈴木、峰岸
も歌っている。

x x x
1 曲目が終わる。会場から拍手。きぬ
が客席に向かい、リコーダーを持った
手を振る。観客の女性の一人が、満面
の笑顔で中腰になって手を振る。

x x x
栄子と美咲の『ブルーライト・ヨコハ
マ』が始まる。ゆっくり、通常のペー
スの2倍の遅さで歌う二人。

x x x
歌い終わり、会場から拍手。小声で

美咲 「倉田さん、やりましたね！」

笑顔の栄子。栄子が編んでいた赤いマ
フラ―をした中年の男性客が立ちあが
って大きな拍手をしている。

x x x

恵美 「それでは、残るは2曲になりました。

峰岸幸三さんの『河内音頭』、最後は横川

保さんの『アメーzing・グレイス』です」

緊張した表情の峰岸。美咲が合図をするとマイクを持って歌いだす。

x x x

2番まで歌う峰岸。美咲がふと客席に目をむけると、峰岸の娘が客席で目に白いハンカチをあてて時節涙をふいているのが見える。美咲の口元がゆがみ、目が涙で赤くなる。

x x x

歌い終わった峰岸。小さく美咲に会釈して、恵美に介助されて演壇を降りる。会場から拍手。

x x x

横川がピアノの前に座る。手が震えているのを、左隣の美咲がやさしく触る。

美咲 「練習どおりで大丈夫です」

弾き始める横川。隣で和音を弾く美咲。

x x x

汗いっぱい横川。

客席はシンとして見守っている。

x x x

弾き終わり、客席から大きな拍手。

子供「おじいちゃん、スゴイね！」

客席の子供が叫ぶ。横川が美咲に

横川「孫なんです」

美咲「最後までよく練習されましたね」

横川にうなずき、満足気な美咲。

恵美「有難うございました。本日はこれにて

プログラムを終了させて頂きます」

客席から拍手（F.O）

○青山リハビリテーション病院・外観

雪で花壇が白くなっている。

○同・廊下

美咲が廊下の奥でゴミの集荷をしている。恵美がやってくる。

恵美 「田中さん、峰岸さんのご家族の方お迎えにいらしたから、お見送り、」

美咲 「あ、有難うございます」
手をとめる美咲。

x x x

恵美と並んで廊下を歩く美咲。

恵美 「良かったわね、峰岸さん、最期は家で
いられることになって」

美咲 「、、そうですね、、良かったです」
恵美を見てうなづく美咲。

○同・出口

車椅子の峰岸と付き添う敬子と由紀。

由紀 「峰岸さん、どうぞお気をつけて」

敬子 「どうもお世話になりました」

美咲 「どうぞお気をつけて」

峰岸は後ろにいる美咲をちらと振り向くが、無言のまま、また前を向く。
出口の自動ドアが空き、敬子が深く頭をさげる。その瞬間、峰岸が背を向け

たまま、右手をあげて、手を振り、ずつと振りながらドアの向こうに。
美咲の目に涙がこみ上げる。庭の木々に雪がちらほら舞い落ちている。

○同・事務局・中（数週間後）

美咲が事務局長の前で背筋を伸ばして立っている。お辞儀しながら、

美咲「今日で失礼させて頂きます。大変お世話になりました」

渡辺「ご苦勞様でした。人生長いですから、また勉強して戻って来てください」

美咲「有難うございます！」

渡辺「それから、これ、」

渡辺が大きい封筒を美咲に差し出す。

渡辺「レクリエーションの時に撮った全体写真が良く撮れていたの、病院のパンフレットに使わせて頂きましたよ。あと、写真も入れておきました」

受け取る美咲。もう一度お辞儀をする。

○同・外

美咲、中庭からレクリエーション室を眺める。新任の女性がピアノを弾いている。その横に横川と栄子、きぬ、鈴木の間々々。歩きはじめる美咲。ベンチの前で足を止め、一瞬、顔をゆがめる。

○坂の上・外

病院の門を出て急な坂を下る美咲。封筒から写真を取り出しながら歩く。高台の坂の上から、目の前には海が見え、空との境界線がわからないほど眩しい快晴。取り出した集合写真に早苗、金田、峰岸、全員の微笑む顔、顔を。写真を眺めて微笑む美咲。境界線がさらに歪んで空の青と海の青が大きく揺れる。また歩き出す美咲。海に光の反射が眩しく揺れている。

《完》

2000字詰原稿用紙換算 130枚